■ 題 名 ■

スマートフォンの普及と監視・プライバシー問題への意識に関する一考察

An opinion about general position of privacy issue,
use of smart phone

吉田　達　YOSHIDA Itaru

新潟大学人文学部

< iyoshida@human.niigata-u.ac.jp >

■ 要 旨 ■

2011 年は、東日本大震災を契機にソーシャルメディアやスマートフォンが広く一般に注目を集めた年となったが、それらの一般への普及は、スマートフォンが扱う各種情報をサービス提供者がユーザー側に無断で包括的に収集するという、個人情報を巡る新たな課題を表面化させることにもなった。カレログや Carrier IQ などに代表される、個人情報保護の観点上好ましからざる状況の現出は、専門家を中心に議論と注意喚起が行われたが、Twitter などでの人びとの会話を見る限り、問題意識は一部で共有されるに留まった感が強い。本報告では、ツイッター上での言説を主たる手がかりとして、スマートフォント個人情報をめぐる問題や、スマートフォン時代の情報活用と個人保護についての現状に関する考察を行う。

【 キーワード 】

スマートフォン、プライバシー意識、監視社会、行動トラッキング、ビッグデータ

■ 問題意識 ■

ネット端末としてのモバイル機器の性能は 2000 年代に飛躍的な発展を遂げたが、小型・省電力化した GPS チップの普及をはじめとする 2000 年代後半の技術発展は、多機能高性能な統合情報端末としてのモバイル端末を適価で供給することを可能とし、WiFi や 3G を利用した高速無線通信環境の整備・普及とともに、モバイル・インターネットを私たちの身近なものとしていった。特に、iPhone の登場による 2008 年前後からのスマートフォンブームは世界的にモバイル・インターネットの機運を高め、このことは、モバイル端末での利用を前提とした、さまざまなサービスがネット上に展開される決定打となった。

2008 年頃まで、パソコンを通じて利用することが一般的で、モバイル端末からの利用はごく限定的なものにとどまっていたインターネット上の各種サービスは、スマートフォンの登場と普及によって新たな局面を迎えることになる。ネット上のサービスを考えるとき、パソコンからの利用とスマートフォンからの利用とでもっとも大きな相違点は、端末を利用する人がほぼ完全に特定できる、という点にある。パソコンからのサービス利用では、一人のユーザーが複数のパソコンからアクセスする可能性や、一台のパソコンを複数の人びとが共用する可能性があり、接続しているユーザーを識別・同定することは簡単な作業ではない。たとえば、ユーザーの閲覧行動やサービス利用状況を追跡・把握するための行動トラッキングは、ネット上でのサービス提供や広告事業において重要な要素であり、このためにはユーザーをなるべく継続的に同定できる仕組みが求められる。通常、こうした目的には Cookie が用いられ、重要なサービスでは ID・パスワードによる認証が行われることになるが、Cookie、特にトラッキングにしばしば用いられる 3rd Party Cookie は、ウェブブラウザでオプトアウトできるほか、ユーザーが任意のタイミングで消去・変更することもできるので、継続的なユーザー識別・同定の手段としては確実性にかける。また、Cookie による識別では同定できるのは特定のブラウザからのアクセスでしかなく、パソコンの使われ方を考え合わせると、ブラウザの操作者が特定のユーザーを指していると考えてよいかという点にも疑問符が付きまとう。これに対し、多くの人が常日頃から携帯するスマートフォンは、複数人で共用されることがほぼなく、一人で複数の端末を使い分けるような利用も一般的ではない。つまり、スマートフォンからのアクセスは、基本的に特定の 1 ユーザーによってのみ行われることが容易に期待できる。パソコンに比べて制限が多くなりがちなスマートフォンの環境では、伝統的に UDID や IMEI といった本体端末に紐付けられた識別子がユーザー認証のカギとして利用されてきており、また、通信時の情報のやり取りをユーザーが検証する手段が乏しいといったことなどもあって、スマートフォンは、サービス提供者が利用者を継続的に把握・追跡する上での好条件がそろった環境になっている。しかし、こうしたことは一般に広く理解される情報にはなっておらず、携帯電話事業者からのアナウンスもあまり行われていないのが実情である。実際、2011 年の半ば以降に話題となった複数のサービスやアプリによる過剰情報収集の実態は、ユーザー側からの指摘によって表面化した。

こうした問題の確認、検証、共有といった活動は、Twitter をはじめとするソーシャルメディアを活用して行われていたが、そうした情報は一般の人びとにどのような影響を与えていたのだろうか。このことについて、Twitter の関連ログからこの問題を考察することが、

本報告の第一目的である。

■ Twitter への発言にみる一般ユーザーの情報行動と端末に関する意識 ■

本報告では、大阪大学の松村真宏氏作成の ttc と使い、「カレログ」「applog」「Carrier IQ」をそれぞれキーワードとして収集した Twitter のログ約 7 万件を利用する。ログの収集は、それぞれのサービスが話題となった時期から現在まで、一日 1 回を基本に実施した。具体的には、カレログが 2011 年 8 月 31 日から、applog が 2011 年 10 月 4 日から、Carrier IQ が、2011 年 11 月 26 日からの開始となっている。

いずれのキーワードでみても、最初に問題の指摘と識者を中心とした確認や検証の発言に、提起された問題への「こわい」「ひどい」といった感情的な反応で発言数が爆発した後は、ゆるやかに減衰し、一日に数発言から十数発言程度の専門的ないし技術的な話題が細々と続くという構造が見出せる。ただ、これらのうち「カレログ」だけは、技術的な話題ではなく、一般の人びとがある種の代名詞として利用していて一日あたりの発言総数もおおよそ 20 発言強を保つという、他のキーワードとは異なる状況を示している。

「カレログ」を含む発言として収集したデータは、2012 年 4 月下旬の時点で、5 万 5 千発言強あり、発言した ID の総数は 4 万強となっている。このうち、いわゆる単純リツイート（冒頭から RT で始まる発言。ただし、公式 RT と非公式のものとの区分は出来ていない）は 2 万 1 千発言弱（RT された発言をユニーク化すると全部で 3300 強となる）であった。なお、発言 ID の大半は収集ログ全体で 1 ～ 2 発言しか観測されなかったものであり、5 つ以上の発言が収集された ID は 482 に留まる。ちなみに、発言数 5 の偏差値が 62.66、発言数 10 の偏差値が 75.66 となる。

こうしたことからは、カレログという単語が、特定の一部にのみ共有される特殊なキーワードというよりは、ある程度一般性をもった単語として認知されている可能性が窺える。収集したログの中で、もっとも多くリツイートされていた発言は「カレログを入れられたら彼女の誕生日に出張と偽って iPhone 本体だけ遠方に宅配し、位置を確認しながらしょんぼりしてる彼女を後ろからそっと抱きしめて驚く彼女の耳元に「二人の距離はアプリなんかで測れないんだぜ…？」と囁く彼女がいない。」というもので、これが 2084RT を数えた。時点の発言は「ドラゴンクエスト I でローラ姫を助けると貰える「おうじょのあい」というアイテムは、使用すると次のレベルまでの必要経験値と、現在地からラダトームまでの歩数を教えてくれるんだけど、あれってカレログをインストールしたスマホなんじゃないかな。」というもので、これが 1303RT、その後に「編集担当さんがカレログで 絵 描 き や 漫 画 家 を 監 視 で き る ！と言ってた。やべぇよ、やべぇよ・・・」という発言（1035RT）、671RT のネタ発言をひとつ飛ばして上位 5 番目に、「『カレログ』の問題性が話題にされているが、これが『カノジョログ』だったら烈火の如く叩かれただろうし、『コドモログ』だったら絶賛されるだろう。如何に子供の人権（ついでに男性の人権）が軽視されおもちゃ扱いになっているかを測るリトマス試験紙になっている感がある。」（585RT）といった発言に人気が集まっている。

カレログを含む発言全体から見て取れることは、ケータイやスマートフォンが個人と深く結びついた情報端末であり、それをカギとした個人監視や追跡を好ましく思っていない一般の人びとの意識である。しかし、そこに見えるのは漠然とした不安であって、技術や

規約といったものの具体的な改善を考えるという能動的な姿勢より、不安を抱えつつもただそういうものとして受けいれていくという、受け身の姿勢での発言が少なからず見て取れる。先ほどあげた被 RT 数第 5 位の発言が指摘することともやや被るが、Twitter のログからは、「カレシの行動をチェックしよう」という非常にわかりやすいメッセージとともに私たちの眼前に最初に現れたカレログが、監視に関する漠然とした不安にカタチを与える代名詞的存在として人びとに受容されたという仮説が見えてくる。また、発言総数としてはそれほど多くないものの、カレログの利用を積極的に肯定し自身でも利用していることをうかがわせる発言が一定数収集されていたり、二人の関係が良好であればなんら問題のないことだという趣旨の発言が共感を集めていたりといったことも、モバイル・インターネットとプライバシーを考えていく上で重要な論点となる。

■ ネット社会の情報利用とプライバシーに関する意識に関する考察と本報告の課題 ■

他者から監視されることはあまり気持ちのいいことではないが、現実問題として情報化社会の機能を円滑に利用するためには、一定レベルでの「私」に関する情報をサービス提供者に開示することが欠かせない。その意味において、スマートフォンの活用は、既存のネットサービスが抱えていた不便や限界を改善する一つの可能性でもある。したがって、これからの状況を考えるためには、提供されるサービスがもたらす利便性と、そこに情報を委ねることの危険性ないしリスクのバランスをうまく調整していくことが不可欠である。今回収集したログをみていくと、カレログやルナルナといったツールを積極的に活用し、自らの情報を、関係者に対して主体的、かつ選択的に開示していこうとする意識の存在なども見えてくる。しかし、そうした意識は、個々のツールの活用というレベルのものに留まっていて、活用可能な状況の前提を支える制度やシステムの整備といった点はまだそれほど意識されていないようだという状況も同時に窺えた。高木浩光氏に代表される識者や研究者の活動や発言は一定数の注目を集めているものの、その論点や主張が全体の共通理解となったり議論として高まったりしていく傾向は、少なくとも手元のログからは読み取ることが出来なかった。これには、マスメディアなど一般に広く届く情報では、それぞれの問題が、個別の事例・問題として語られがちであることも影響していると考えられるが、この点に関しては、より多面的な検証が必要となるので、本報告ではこれ以上の言及は控えることとする。

また、今回の報告は、Twitter 上でモバイルとプライバシーがどのように語られているのかを観察することを主目的としたため、Facebook や mixi といった場で、この問題がどのように語られているのかといった観点が含まれていない。その意味では非常に中途半端な研究となってしまっている点は問題である。その他、ログに現れてくるのは、RT も含み、あくまでも発言行為を伴うユーザーの能動的な行動意思でしかないため、Twitter の情報をマスメディア的に消費する受動的なユーザー行動は汲み取ることが出来ていない点も問題となるであろう。これらについては、別途方法を考えたい。

ネット社会のなかで、個人情報やプライバシーをどのように扱っていくかという問題は、今日非常に大きな問題となっている。この問題では、法制度の整備だけではなく、サービス提供者と利用者双方の意識やモラルにまつわる論点が重要になってくる。本報告がそのためにどのようなことが考えられるのかを考えるひとつの足がかりとなれば幸いである。